

未来眼やまがた 第18回

自立すること、すなわち公益の実践

地方分権といわれる中で、新しい地域づくりの先頭に立つリーダーが求められている。新田嘉一氏は、たった2頭の豚で養豚業を起し、平田牧場を日本有数のブランドに成長させた起業家であり、また庄内発展のため多くの功績をあげたリーダーでもある。新田氏がこれまで、どのような思いで事業や地域づくりに取り組んでこられたかについて伺った。

■ 優れた経営者の条件とは

町田 当地に来て15年、新田会長にはこれまで大変お世話になり感謝している。人間は15年間もお付き合いしていると、普通は“あら”がみえてくるものだが、

新田会長は近づけば近づくほど大きくみえてくる。

今日はまず、ご自身の経営者としての「資質」についておたずねしたい。経営者は「知」「情」「意」のいずれの資質も一定のレベル以上でなければ成功しないと思っているが、人によって3つの要素にも強弱がある。長い間私は、新田会長は特に「意」に秀でた方であると拝察してきたが、それだけでなく時代の変化を見抜く「感性」にも優れた経営者であると、あらためて感じるようになった。

現在のように時代の大きな変わり目の時は、この時代の変化を見抜く感性が特に大切だと思う。これは、新田会長が若いころに、絵描きになりたかったことと関係があるのではないかと。感性の鋭さが同時に時代の洞察力になっているのではないかと、勝手に解釈している。

新田 大変な過大評価で、自分では特に意識しておらず、偶然が重なって今に至っているだけ。

町田 代々続く米農家を受け継がず、わずか2頭の豚で養豚業を始められたことも、時代をみる目や感性が優れていたからこそ実行できたのではないかと。

しかも養豚だけでなく加工（2次産業）、販売（3次産業）と、川上から川下まで一貫して事業を展開し、東京の激戦地で成功を収めておられ、最近話題になっている“農業の6次産業化”をすでに実践されてきた。

特に東京進出の成功は、店舗づくりのセンスに芸術的な美意識が活かされたからではないかと感服している。

新田 昔は「農家の息子はビジネスで成功しない」と言われ続けた。当時の銀行は有名企業にばかり融資し、われわれのような農家は全く見向きもされなかった。しかし、町田議長が来られて、ビジネスだけでなく社会的な面についても、初めて評価してくれたことに感



●町田 睿（まちだ・さとる）

1938年、秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年株式会社庄内銀行取締役副頭取、1995年取締役頭取に就任、2008年より取締役会議長。

謝している。

町田 私はずっと“お金は人に貸すもの”と教えられてきた。銀行は企業の融資についても本来、経営者を見抜く力が必要となる。

■ 自立し、社会に貢献することが公益

町田 以前貴社にお伺いした折りに、御社の経営理念を拝見したが、昔から「より豊かな食生活・食文化を提案する感動創造企業」になるという経営理念を掲げ、その実現のために「食材の安全の追求」等しっかりとした基本姿勢を掲げて事業を進めておられることに、敬服したことがあった。

そこで感じたのは、「公益」とはフィランソロピーやメセナなど、何か特別なことをするのではなく、事業を通じて常に人のために役立つこと。そのために、経営理念に沿って堅実な会社経営を行うことこそが重要であると得心した。

東北公益文科大学は「公益学」を学ぶところであるが、新田会長の会社では、すでに公益を実践されているといえる。

新田 本当の公益とは、一人の人間が社会で自立して、利益を上げて、社会に貢献すること。今こそ、この公益の原点に立ち戻るべきだろう。

東北公益文科大学とは本来、そうした人材を輩出する宿命を担っているはずなのだが、大学の取り組みはまだまだ足りない。

町田 新田会長は、10年前「庄内に大学を」と尽力され、それが東北公益文科大学の開学に結びついた。この6月に理事長に就任され、これから庄内の人材育成のために貢献いただけるものと期待している。

新田 大学は多額の税金で運営されており、何としても大学の建て直しが急務だ。この大学を地域に役立つ大学にしなければいけないという覚悟を持って、理事長を引受けた。

町田 これからは少子化で、大学、特に私立大学の経営は厳しくなる。私はかねてより、大学には教育研究をしっかりと行う学者等の人材と、マネジメントをしっかりと行う職員等の人材との、それぞれの資質を高める



●新田 嘉一（にった・かいち）

1933年、旧平田町楯橋（現酒田市）生まれ。庄内農業高卒業後、農業に従事。67年に株式会社平田牧場を設立し、養豚経営を拡大。食肉の生産、加工、販売を行うほか、外食産業を展開。酒田商工会議所会頭や酒田市体育協会会長、東北横断自動車道酒田線建設促進庄内期成同盟会会長などの役職を歴任、現在、東方水上シルクロード貿易促進協議会会長や山形県日中友好協会副会長、また2009年6月より東北公益文科大学理事長。

必要があると考えてきた。

環境は厳しいが、優れた経営者である新田会長が理事長に就任されたことで、その手腕がいかに発揮され、大学の発展につながると確信している。

新田 大学も地域も企業もこれからはそれぞれ、自立が求められている。“後継者がいない”という問題も、行政課題とされているが、それはむしろ経営者自身の問題ではないだろうか。1次産業で後継者がいないとか、後継者不足で商店街が衰退するなどというのは本末転倒である。自分の背中を子どもに見せて、子どもが後を継ぎたいと思わないようでは、経営者としては十分とはいえないだろう。

■ 県境を越え連携、交流人口を増やせ

町田 いま日本には金融経済危機など様々な課題が山積しているが、私はその中でも特に少子化対策、つまり人口減少にどう歯止めをかけるかが最重要課題だと思っている。

最近、北都銀行との経営統合もあり、秋田県に行く機会が多いが、庄内と秋田は共通しているところが多いと感じている。例えば、庄内は最上川、秋田は雄物川の周辺に田園地帯が広がり、日本有数の穀倉地帯と

なっている。山形・秋田両県ともに人口減少が激しく、経済も停滞しているが、これからはアジアの時代がやってくる。日本海を挟んで、中国東北三省や極東ロシアとの関係が深い、山形・秋田両県が非常に重要な役割を果たすことになるだろう。

新田 現在のように人口が減り続けるのは困る。それを何とかするためには、何としても交流人口を増やすことが重要で、そのために「北前船コリドール構想」を立ち上げた。これは県境を越え、庄内と秋田とを一つの経済圏として発展させるのがねらいだが、最近では、北海道や青森、新潟などからも交流連携の話が持ち込まれるなど、成果が少しずつあらわれている。こうした活動を続けることによって、地域が元気になればと期待している。

町田 これからは経済圏を広げ、人の行き来を活発にさせることが重要となる。県境を越えた経済圏を形成することで、行政の枠にとらわれない実質的な経済圏を広げる必要がある。それが結局は道州制のベースにもなるだろう。

今年4月、日本海沿岸東北自動車道（日沿道）の酒田みなと一遊佐間の整備計画への格上が決まり、いよいよ7月に着工した。この日沿道の整備にも“陸上の北前船”として新田会長がご尽力された。それにして

も、北前船コリドール構想の着眼点はさすがだと思う。

また新田会長は、中国東北三省（旧満州）や極東ロシアに早くから着目し、20年前から東方水上シルクロードに取り組みられたのも、素晴らしい先見性だ。このたび、中国の黒龍江省からの「功勳賞」受賞は、20年近いご努力がようやく認められたということで、心からお祝い申し上げたい。

新田 人脈に恵まれたこと、いろんな立場の方が東方水上シルクロードや北前船コリドール構想に対して好意的に理解してくれたおかげで、活動がうまくいっている。また、北前船コリドール構想についてはマスコミなどがPRしてくれたことも大きい。先日も関西から対談の話が持ち込まれた。

町田 関西と庄内は、江戸時代に北前船などによる経済文化交流があった。今後、その交流がもう一度見直されるかもしれない。

新田 これまで山形から関西に進出して成功した企業は皆無に近い。これから庄内と関西の交流が復活したら面白いだろう。

町田 これまでとは違う新しい交流がどんどん生まれてくることが期待できる。交流人口の拡大には“観光”が不可欠、庄内には多くの観光資源が眠っている。それを掘り起こして交流人口の拡大に結びつければ、可能性が広がるのではないかな。

新田 行政に任せきりでは何もできない。経済界がもっと積極的に動くべきだと考えている。

町田 行政に対しては「依らしむべし、知らしむべからず」の、江戸時代から地域に染みついた意識が残っている。これを払拭しないと地域の自立と発展は見込めない。

■ 庄内の文化を守り抜く

新田 私は子どものころから、「家庭があって、地域があってこそ、国がある」という考えを持っている。



寄暢亭（きちょうてい）

今から約110年前に初代酒田商工会議所会頭・小山太吉の別邸として建設。庭園は酒田の名庭師・山田挿遊（1830～1896）氏によって手がけられ、北前船文化を伝える見事な庭園は、まるで絵画のような美しさである。

庄内はいま、人口の減少が著しくこれを何とかしなければいけない。この地域を何とか守らなくてはならないと思っている。庄内に生まれ育った若者が東京に出たきり戻ってこないのは、庄内に働く場がないからだろう。

町田 新田会長の愛郷心は、まず家族を愛することから始まり、酒田を愛し、庄内を愛し、山形を愛するというように、同心円状に広がっている。社名を「新田牧場」とせず、出身地である平田町から「平田牧場」と名付けたのも、そうした流れからかと納得できる。

新田 本日の対談会場となっているこの建物「寄暢亭（きちょうてい）」は、初代の酒田商工会議所会頭が残した建物であった。その後、持ち主が倒産し、東京の不動産屋が買い取ろうとしたのを私が引き取った。

町田 湊まち酒田の象徴である文化遺産「相馬樓（そうまろう）」も、新田会長が倒産の危機から救済していただいただけでなく、酒田の観光や文化の発信拠点として、もう一度立て直された。

新田 庄内は、かつては文化が栄えた歴史あるまちであるが、今は暗たんたる状況だ。この誇り高い庄内の歴史と文化を何としても守らなくてはならない。その一心でこれまで取り組んできた。

■「夢」を持つことが大事

町田 新田会長と話をするといつも元気をもらえる。たえず大きな夢を掲げ、その夢の実現に向かって実行していくエネルギーをいつも感じる。

新田 これまでずっと逆境の中をくぐり抜けてきたからだだろう。昭和一ケタ生まれは、子どものころ学校にも通えず、本もなく、文字通り“無”からの出発だった。だからこそ、夢を描き、その実現のために奮闘してきたのだろう。

町田 逆境という意味では、昭和一ケタ生まれは幼少期の戦争体験が大きいのもかもしれない。戦後生まれには、逆境をバネにできないひ弱な人間が多いのではないかと、心配している。人間教育の場としても東北公益文科大学に期待したい。

新田 夢を持てる人間が少なくなったと思っている。

それは、戦後の教育にも問題がある。米国は日本に対し二度と戦争が起きないように、それまでの日本の教育を破壊し、骨抜きにしてしまった。

今、国のことを真剣に考えている人がどれだけいるだろうか。また、子どもと真剣に向かい合っている教師がどれだけいるだろうか。生徒に責任を持つ先生の存在が教育には必要だ。

■ 生まれた場所で生き、働くこと

新田 人口減少、高齢化、経済の停滞など、今の日本の悪いところがすべて庄内に凝縮している。このまま停滞するわけにはいかない。

現在、人口が減ることをだれも真剣に受け止めていない。「何とかなるだろう」と考えている人が多く、山形県の高齢化率25%という課題を誰も真剣に考えない。「何とかなる」ではなく、「何とかしなければ」ならない。

庄内が活性化するためには、この地域で働く人が増えなければならない。今の若い人はみんな「仕事がない」と東京へ行ってしまおう。

町田 全く同感だ。最後に新田会長にとって、理想とする将来の庄内の姿とはどのような地域だろうか。

新田 自分の子どもたちがずっとこの地で育つことができる地域、庄内に生まれた子どもたちがずっと住み続けることができる地域が理想。そのためには、道路など社会的なインフラの整備、また大学等での人材育成などが大事である。また、会社に入らなくても自立して生きて行ける社会を作ることが大事だと言っている。雇用対策は確かに重要だが「仕事がない」というのは一種の甘えだ。仕事がないれば自分で作ればいい。それが、先ほど申し上げた“自立した人間”であり、それをできる人が公益の実践者である。

人間は生まれた場所で働き、生きることが一番。それは自分を育ててくれた地域に対する“恩返し”でもある。

町田 ご自身の体験を踏まえながら、これからの庄内のあり方や人間のあり方など率直に語っていただき、ありがとうございました。